

自立支援から看取り介護まで
幅広く支援するために

桑名市社協ホームヘルパーステーション

1. 社協ヘルパーステーションの紹介

2. 社協ヘルパーステーションの役割

3. 事例紹介

4. 今後の課題

1 社協ヘルパーステーションの紹介

1、経緯

平成16年12月	合併時	旧桑名・長島・多度にヘルパー事業所が存在
平成19年 4月		旧桑名・多度の統合にて2事業所となる
平成 21年 4月		旧桑名(多度)と長島の統合にて現在1事業所に至る

2、運営事業

介護保険

- ・訪問介護
- ・予防訪問介護

障害福祉サービス

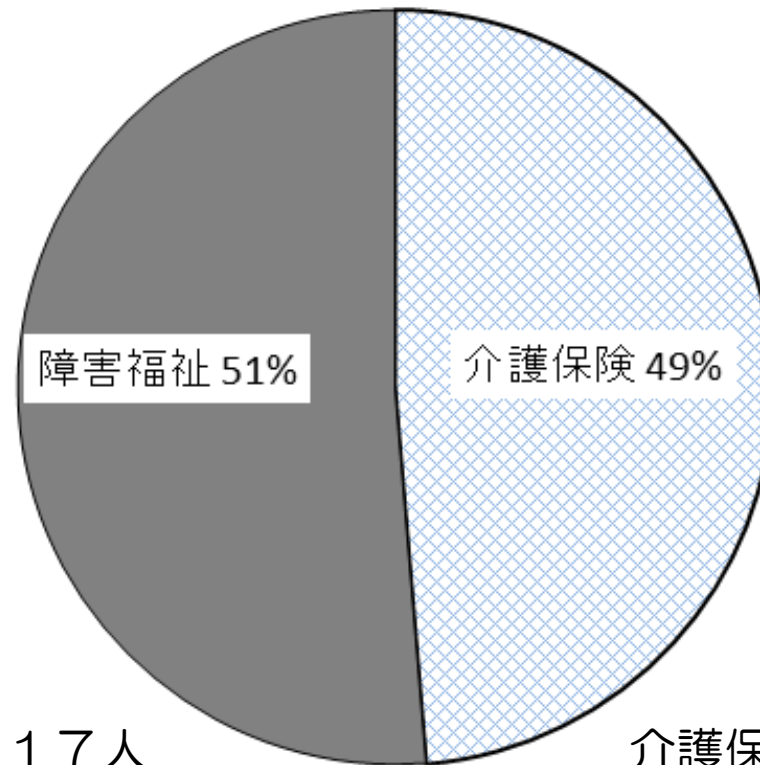
- ・居宅介護
- ・重度訪問介護
- ・同行援護
- ・移動支援

福祉有償運送

3、職員人数 39名 (うちサービス提供責任者6人 事務1人)

利用状況 ① サービス利用割合

介護保険・障害福祉の利用人数

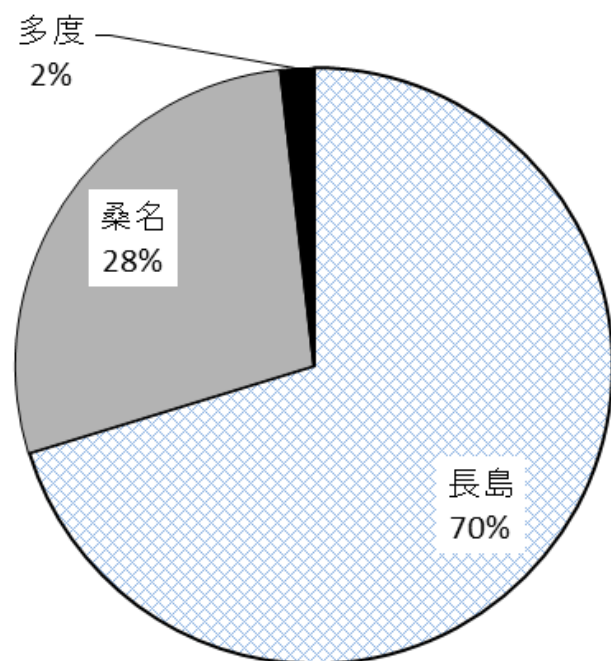


障害福祉 117人

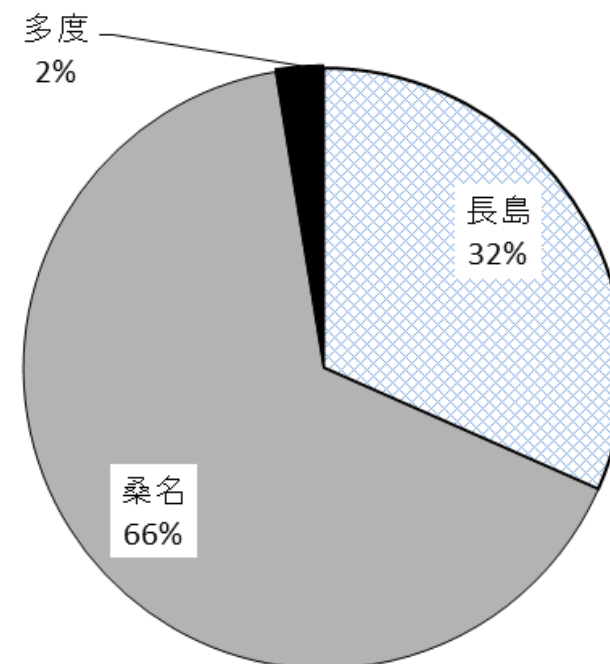
介護保険 111人

利用状況 ② サービス×地域割合

介護保険(予防含む)における利用地域



障害福祉(移動含む)における利用地域



2 社協ヘルパーステーションの役割①

◆多様なニーズに応える

地域包括ケアシステムにおいて、
介護予防の視点～在宅看取りまでの関わりが必要不可欠である。

・資格取得

介護福祉士	21人
ケアマネ	9人

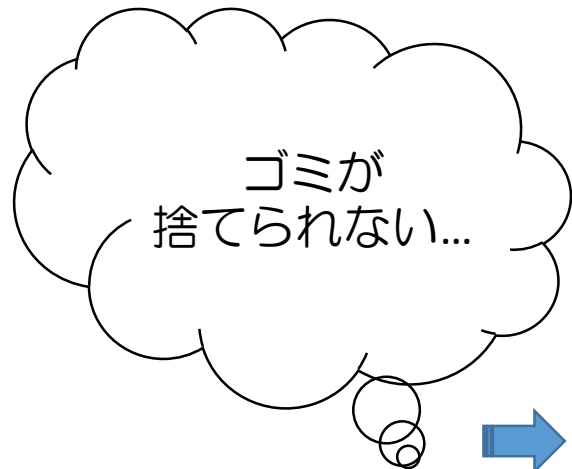
喀痰吸引	(うち1名は予定者)	6人
有償運送	ドライバー資格	20人
同行援護	ガイドヘルパー資格者	31人
救急法	応急手当普及員	3人

2 社協ヘルパーステーションの役割②

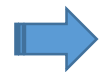
◆地域の中で介護力を高める

- 初任者研修の講師を務め、ヘルパーの育成と自己研鑽に励む。
- 桑名市訪問介護事業者連絡協議会の代表及び事務局を担い、研修会や勉強会の発信。

◆他業種との連携で、在宅限界点の向上につなげる



権利擁護や配食サービス、
ビーズマットやベルトなど作製を
ボランティアに依頼。



市の個別収集に依頼

事例1 卒業を目指した集中的な関わり

Aさん（女性） 要介護5 夫と二人暮らし
細菌性髄膜炎、正常性水頭症により入院。
リハビリも進み、車イスを利用し退院となる。



家族の介護力がないため、デイサービスやショートステイを使いながら、在宅時ヘルパー利用となる。(起床介助・ポータブルトイレ誘導・パット交換)



キーパーソンである夫に、トイレ誘導とパット交換を指導。

本人の出来る事を探す。

- ・手すりがあれば立位がとれる！
- ・家の中で歩行器があれば移動できるのではないかと？
→ 訪問リハビリに相談し、試してもらおう。



要介護3 現在は夫が介護、通院時の乗降のみ対応となる。

事例2 在宅での看取りを支える

Bさん（男性） 要介護5 妻・長男家族と同居
筋萎縮性側索硬化症（ALS）。

本人のADLが低下し、家族が腰を痛めたため、
介助が困難になってきた。



家族より入浴介助の依頼。

本人は家族での対応を希望され拒否されたが、試してみよう！と勧め実施。



週1回の入浴→ヘルパーへの信頼が高まり、週3回の利用となる。
理学療法士に指導され、入浴後、機能訓練の補助的なことを行う。
家での転倒時は事務所と連携し、すぐ訪問できるよう体制をとる。
ADLが著しく低下したため、訪問看護を勧める。



呼吸困難となり救急搬送。数日後、永眠。

事例3 アルコール依存症からの回復

Cさん（男性） 障害福祉サービス利用 独居

普段はとても大人しいが、アルコールが入ると人が変わり怒鳴り散らす。



夏場はクーラーがなく渴きを潤すため、さらにアルコールの量が増える。



お金を貯めてクーラーを購入する事をすすめる。



定期訪問時倒れていた為、水分を取ってもらい救急搬送。



入院中、医師・相談員よりアルコール外来をすすめられ受診する。



禁酒を実行するが途中で飲んでしまい、すぐに病院へ連絡をし、受診に引っ張って行った。



現在は禁酒を継続中。地域の活動の場にも顔を出すようになった。

4 今後の課題

- 急変している現場に遭遇すると、事務所からサービス提供責任者が駆けつけている。市内全域をカバーしているが、遠方の利用者に対して、事務所の者が駆けつけるまで時間を要するため、ヘルパーが一人でどこまで対応できるのかが課題。
(救急対応が遅れる可能性がある)
- 社協として利用者の自立支援に伝えていくために、利用者に一生懸命関われば関わるほどあれもこれもと援助してしまいがちである為、本当に必要なことかを見極める力を養う。
- 経験を積んだヘルパーが、その経験と技術を生かして援助をしてくれているが、ヘルパーの年齢も高くなっている為、若いヘルパーを採用しつつ、育てる必要がある。